

アメリカ植民地の経済とスペイン黄金世紀

——《宮廷の侍女たち》のエンコミエンダ

小原 正

はじめに

一七世紀のスペインでは、ベラスケス、カルデロン、ケベードといった画家や詩人、戯曲家が数々の優れた作品を生み出し、文化的には黄金世紀と呼ばれる。しかし同時にこの時期のスペインは、ヨーロッパにおける覇権争いに敗北し、政治経済的には衰退しつつあった。「太陽の沈まぬ帝国」と呼ばれた時代は、すでに過去のものとなっていたのである。それでは、黄金世紀のスペインをささえた収入源は何だったのであろうか。

このように問うのは、この時期、衰退しつつある帝国の中心マドリッドでは、王族や有力貴族が非常に贅沢な暮らしをしていたことも知られているからである。彼らはピロードやサテンなどの高価な布地で仕立てた衣装を身にまとい、宝飾の施された剣や懐中時計、指輪やブローチで身を飾り、豪華な馬車に乗り、何十人もの使用人を雇い、仮装舞踏会や饗宴を開いたのである。さらに有力貴族は、画家や詩人の後援者となって資金を提供し、交友関係を築いた。なかには、個人の邸宅に画廊をもつ者もあったほどである（エリオット一九八二、Dominguez Ortiz 2012）。多くの有力貴族が芸術活動を奨励したことが、スペイン黄金世紀の経済的な土台となっていたのである。

しかし本稿で論じるように、スペインの一七世紀は、多くの有力貴族が深刻な財政難に陥っていたことでも知られている。一六世紀末から一七世紀中葉にかけてのスペインでは、疫病による人口減少と農業危機が起り、そこに国内主要通貨である銅貨の通貨危機が重なった。このため、多くの経済活動が停滞し、有力貴族が領地から得ていた地代や税収が大きく減少した。また当時の有力貴族の重要な資産のひとつであった長期国債は、スペイン王室の財政破綻によって著しくその価値を減じた。領地の地代や税収、そして長期国債の利子を主な収入としていた多くの貴族は、その収入源が崩壊してしまったのである。彼らは、それでも財政をやりくりし、危機を乗り越えるために新たな財源を探し求めた。

このような有力貴族が一七世紀を通じて獲得していったもののひとつが、アメリカ植民地のエンコミエンダ、つまり特定の村落のインディオから貢納をうける権利であった。スペイン王室の側でも、莫大な債務が累積し、国家財政が破綻していく中で、アメリカ植民地のエンコミエンダは、恩賞として与えることのできる残り少ない財源のひとつであった。また、銅貨の通貨危機が起る中、アメリカ植民地のエンコミエンダから届く銀には、その額面以上の価値があった。その結果、有力貴族はアメリカ植民地のエンコミエンダを王に嘆願し、交渉し、獲得していったのである。

さて、黄金世紀のスペインの宮廷というと、読者は何を思い浮かべるであろうか。スペインの歴史や文化に詳しくなくとも、この時代を代表する宮廷画家ディエゴ・ベラスケスの絵画《宮廷の侍女たち》(ラス・メニーナス)〔図1〕を目にしたことのある方は多いのではないだろうか。この絵画では、中央の王女の両脇に恭しく仕える二人の侍女が描かれている。この二人は、現代においてもっとも多くの人々の目にふれている黄金世紀スペインの貴族であるといっても過言ではないだろう。しかし、彼女たち自身について実はあまり多くは知られておらず、ましてこの絵画に描かれた彼女たちの華やかな様相から、アメリカ植民地のインディオの暮らしを連想する者はまずいないだろう。しかしこの



図1 《宮廷の侍女たち》(ラス・メニーナス)ディエゴ・ベラスケス作、1656年、プラド美術館蔵。右は一部拡大図。

二人の侍女について調べていくと、ひとりについては本人と父親が、もうひとりについてはその両親がアメリカ植民地のエンコミエンダを獲得しており、アメリカ植民地のインディオとの経済的なつながりが見えてくるのである。

そこで本稿では、『宮廷の侍女たち』に描かれた二人の侍女をとりあげ、彼女たちとその親がどのようにアメリカ植民地のエンコミエンダを獲得したのか、そしてインディオの貢納が生み出す富が、どのようにして彼女たちとその家族の手にわたり、貴族としての身分や生活を支えたのかを描き出していきたい。

本稿がアメリカ植民地のエンコミエンダに着目し、二人の侍女とアメリカ植民地のインディオの経済的なつながりを明らかにする意義は、次の二つの点にある。

ひとつは、アメリカ植民地におけるエンコミエンダの理解に関わる。これまでエンコミエンダは、スペイン人によるアメリカ大陸征服直後から一六世紀中葉までの間、植民地の支配と統治の根幹をなした制度として理解されてきた。この制度の下で、征服者であるスペイン人は現地のインディオから貢納を受け、彼らに賦役を課し、主従関係を確立したからである。そして一六世紀末以降、インディオの人口減少とこの制度に対して課された様々な規制のため、エン

コミエンダの重要性はうすれたと考えるのが通説である(ギブソン一九八一)。しかしそれでは、一七世紀のマドリドの有力貴族が、なぜアメリカのエンコミエンダを獲得しようとしたのか、理解することができない。スペイン本国の宮廷政治を視野に含めれば、一七世紀のスペイン王室はアメリカ植民地のエンコミエンダについて大きな政策転換を行い、有力貴族や廷臣への恩賞として利用したと捉えることができるだろう。

もうひとつは、一七世紀のエンコミエンダに着目することによって、マドリドの有力貴族とアメリカ植民地のインディオとの具体的な関係が浮かび上がってくることである。両者の関係について言及されることはほとんどないものの、黄金世紀のスペインがアメリカ大陸に植民地をもち、インディオとよばれた先住民の人びとを支配していたことは周知の事実である。本稿が明らかにするように、マドリドの有力貴族は、エンコミエンダという制度を通じて、アメリカ植民地のインディオが貢納として生み出す利益を受け取り、高価な衣服や他の貴族への贈答品の代金など、様々な日常の消費にあてていたのである。

まずエンコミエンダ制の変化を概観したうえで、ベラスケスの描いた二人の侍女の実像に迫り、スペインの黄金世紀を支えた歴史背景をより広い視点から捉えなおしたい。⁽¹⁾

一、エンコミエンダ制の変遷

初期のエンコミエンダ

アメリカ植民地のエンコミエンダとは本来、この大陸の各地を征服し新たな領土をスペインにもたらした征服者たちの功績に報いるため、スペイン王室が彼らに与えた恩賞であった。私財を投じて遠征隊を組織し、アステカ王国やインカ帝国を征服したスペイン人たちは、この恩賞によって、服従させた地域の村落を彼らの間で山分けし、自身が

岩波講座

世界歴史

I4

南北アメリカ大陸
一七世紀

【編集委員】

荒川正晴
大黒俊二
小川幸司
木畑洋一
富谷至
中野聡
永原陽子
林佳世子
弘末雅士
安村直己
吉澤誠一郎

岩波書店

目次

地図

展望—*Perspective*

南北アメリカ大陸から見た世界史……………	安村直己	003
はじめに——「実体としての世界史」、「認識としての世界史」		003
一、到達点から見た、南北アメリカ大陸における文明化の過程		008
二、一四九二—一五二八年のカリブ海域	012	
三、カリブ海から大陸へ——一五二九—一五〇年	021	
四、アメリカ植民地の建設か、三角貿易か——一五五二—一六〇〇年	041	
五、周縁で世界史を生きているということ	051	
おわりに——オランダの覇権と太平洋	055	

問題群—*Inquiry*

北アメリカにおける先史時代社会の諸相……………	佐々木憲一	071
北アメリカ大陸への人の移住と パレオ・インディアン文化（二万二八〇〇年前以前）		072

一、極北 Arctic	074	
二、亜極北 Sub-Arctic	076	
三、大平原 Great Plains	077	
四、北西沿岸 Northwest Coast	079	
五、高原 Plateau	081	
六、大盆地 Great Basin	082	
七、カリフォルニア	083	
八、南西部 Southwest	084	
九、北東部 Northeast	089	
一〇、南東部 Southeast	093	

アンデスとメソアメリカにおける文明の興亡…………… 関雄二 105

- 一、アメリカ大陸の古代文明 105
- 二、時代区分 106
- 三、文明形成の基礎条件——更新世環境への適応 108
- 四、公共建造物の出現——アンデスでの先行現象 109
- 五、メソアメリカの先古典期——文明の前奏曲 113
- 六、社会の複雑化の進展——国家への道筋 118
- 七、古典期メソアメリカ社会——文明要素の結晶化 121
- 八、アンデスにおける帝国の誕生 129
- 九、メソアメリカの領域国家——都市と同盟 132

一〇、アメリカ大陸の古代文明の特質——世界観の体現化 135

マヤ人から見たスペインによる征服と植民地支配…………… 大越翼 141

- 一、はじめに 141
- 二、マヤ社会の特質——王権を支えていた対人主義 143
- 三、スペイン人による征服とマヤ人の対応 150
- 四、マヤ人にとっての植民地時代 155
- 五、おわりに——マヤ人にとっての「征服」と植民地時代 163

焦点 Focus

トレント公会議とアンデスにおける先住民布教…………… 網野徹哉 173

- 緒言 173
- 一、アンデスにおける初期の宣教 175
- 二、アンデスにおけるトレント公会議 180
- 三、司祭を訴えるインディオたち 185

一六世紀メキシコからみたグローバルとローカル…………… 横山和加子 195

- 女性と家族を中心に
- はじめに 195
- 一、グローバルな骨格 196
- 二、植民地の新秩序と女性・家族 199

三、女性を介した植民地有力階層の形成——富・権力・姻戚	205
結び	211

「先住民の黄金時代」とセトララー・コロニアリズムの衝撃……………金井光太郎 217

——北米におけるイギリス人の経験から

はじめに	217
一、アメリカ先住民の黄金時代	220
二、ミドル・グラウンドと先住民世界の変容	223
三、セトララー・コロニアリズムと民族浄化	228
おわりに	234

一七世紀フランスの初期植民会社と小アンティル諸島……………大峰真理 239

はじめに

一、フリビュステイエが拓く小アンティル諸島	241
二、王立植民会社と実務者たち	243
三、初期プランテーション型植民地の実像	247
おわりに	254

アメリカ植民地の経済とスペイン黄金世紀……………小原正 261

——《宮廷の侍女たち》のエンコミエンダ

はじめに	261
一、エンコミエンダ制の変遷	264
二、宮廷の侍女たちとエンコミエンダ	270
おわりに	279

徳川家康のメキシコ貿易交渉と「鎖国」……………清水有子 283

はじめに	283
一、ルソンとの初期交渉	285
二、メキシコ貿易交渉の展開と転回	292
三、交渉の破綻	297
おわりに	300

「トナリ」Column

大海を越える情報ネットワーク	
——一七世紀メキシコのクリオオーリョ・アイデンティティ……………川田玲子 66	
スペイン帝国文書ネットワークの昔と今……………佐藤正樹 193	
スペインによるフィリピン統治……………菅谷成子 214	
「辺境」カナダへの進出	
——鱈と毛皮をめぐるイギリスとフランス……………細川道久 237	
ポルトガル帝国からみた環大西洋世界……………鈴木茂 259	

【責任編集】

安村直己(やすむら なおき)

1963年生。青山学院大学文学部教授。ラテンアメリカ史。『コルテスとピサロ
——遍歴と定住のはざまで生きた征服者』(山川出版社、2016年)。

岩波講座 世界歴史 14

第5回配本(全24巻)

南北アメリカ大陸 ~17世紀

2022年2月25日 第1刷発行

発行者 坂本政謙

発行所 岩波書店 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話案内 03-5210-4000 <https://www.iwanami.co.jp/>

印刷・法令印刷 カバー・半七印刷 製本・牧製本

© 岩波書店 2022 Printed in Japan

ISBN 978-4-00-011424-0

【執筆者一覧】

佐々木憲一(ささき けんいち)

1962年生。明治大学文学部教授。日米考古学。

関 雄二(せき ゆうじ)

1956年生。国立民族学博物館副館長・人類文明誌研究部教授。文化人類学・アンデス考古学。

大越 翼(おおこし つばさ)

1956年生。京都外国語大学ラテンアメリカ研究所所長・外国語学部教授。マヤ歴史人類学。

網野徹哉(あみの てつや)

1960年生。東京大学大学院総合文化研究科教授。アンデス社会史。

横山和加子(よこやま わかこ)

慶應義塾大学名誉教授。ラテンアメリカ社会文化史。

金井光太郎(かない こうたろう)

1953年生。東京外国語大学名誉教授。アメリカ政治史。

大峰真理(おおみね まり)

1967年生。千葉大学文学部教授。近世フランス国際商業史。

小原 正(おばら ただし)

慶應義塾大学経済学部准教授。ラテンアメリカ史。

清水有子(しみず ゆうこ)

1972年生。明治大学文学部准教授。近世日本史。

川田玲子(かわた れいこ)

同志社大学他非常勤講師。メキシコ社会文化史・宗教史・図像研究。

佐藤正樹(さとう まさき)

慶應義塾大学経済学部専任講師。アンデス植民地史。

菅谷成子(すがや なりこ)

愛媛大学法文学部教授。東南アジア史・フィリピン史。

細川道久(ほそかわ みちひさ)

1959年生。鹿兒島大学法文学部教授。カナダ史・イギリス帝国史。

鈴木 茂(すずき しげる)

1956年生。名古屋外国語大学世界共生学部教授・東京外国語大学名誉教授。ブラジル近現代史。